

各校ページ【立教池袋中学校・高等学校】

プッチーニ「ラ・ボエーム」のキリスト教的思索

立教池袋中学校・高等学校チャプレン マーク・シュタール



私が初めてオペラを観たのは、中学生の時、故郷のオハイオ州クリーブランドでのことでした。たまたま行けなくなった人の代わりに行くことになったのですが、とても印象深い思い出となっています。その後はチケットが高価なこともあり、なかなか行く機会はありませんでした。大学時代になると、クリーブランドオーケストラのボランティアをしていた関係で、時々、オペラ鑑賞をする機会がありました。お気に入りの一つがプッチーニの「ラ・ボエーム」でした。美しいアリアやデュエットは、閉幕後も長く耳に残りました。当時、私は素晴らしい音楽と煌びやかな舞台に夢中で、物語自体にはあまり注目していませんでした。

この7月、長い年月を経て、東京で「ラ・ボエーム」を再び観る機会に恵まれ、私は喜び勇んで出かけました。しかし、公演が始まるや否や、予期せぬ啓示を受けました。忘却の彼方にあった箇所、さして重要ではないと思っていた場面が私を捉えて離しませんでした。

私は「ラ・ボエーム」がクリスマス・イブのシーンで始まることをすっかり忘れていました。大昔に観た時は、音楽と舞台の豪華さにただ目を奪われていたので、クリスマス・イブで始まる重要性を見過ごしていました。しかし、今回、これは一貫したテーマとして展開していくということが理解できました。クリスマス・イブは、やがて神様の愛と犠牲が明らかになる伏線となっています。数々のクリスマス物語は同じような意図で語られてきました。キリストの物語は、受難、十字架上の死、復活、天国への凱旋へと続きますが、

多くのクリスマス物語は、受難以降へ展開することは稀です。そういう点で「ラ・ボエーム」は異例です。クリスマス・イブで始まり、復活日の直前まで続くのです。クリスマスの精神の本質を反映して、登場人物たちは貧しくとも人生を謳歌し、真実の愛に生きる謙遜な人々です。オペラの終盤は単なる悲劇で終わるというよりも、永遠の愛への賛歌があります。キリストの誕生で私たちに示された永遠の愛を信じる姿勢が問われているとも言えます。

「ラ・ボエーム」は、キリストの生き方と道徳に対するアンチテーゼと見られがちです。ラ・ボエーム（ボヘミアの生活を送る者）という題が、まさに、このアンチテーゼを暗示しています。ボヘミアン（ジプシー）たちは、「伝統的な道徳」、あるいはそのように生きる人々を嫌う傾向にあると思われています。しかし、「ラ・ボエーム」では、「伝統的な道徳」は必ずしもキリスト教的な生き方を意味している訳ではありません。最も「アンチ・ボヘミアン」に描かれている登場人物は、正当で伝統的な道徳を備えているかのように見えて、欲と特権の奴隷になっています。また、ある「アンチ・ボヘミアン」な登場人物は、姦夫です。

オペラに出てくるボヘミアンたちは、キリスト教を捨てたわけではなく、むしろ、キリストが唱えた日常を営んでいました。ボヘミアンたちがキリスト者の模範であったわけではありませんが、無意識ながらに彼らは、真実の愛や自己犠牲を体現していました。同棲している主人公のカップル、ミミとロドルフォはクリスマス・イブを楽しむためにそれぞれの友達と過ごします。彼らは、や

がて誤解やいさかいから別れることになりま
す。しかし、ロドルフォは、ミミの病が重く
なると、自分が面倒を見たいと思い、せめて
暖くなる春まではと思います。ミミはオペ
ラの中で「冬よ、永遠に」と歌います。愛を
つなぎとめられるなら病が長引いても構わな
いという思いです。前幕でマルチェロから「人
は不幸せなら、別れるべきだ」とアドバイス
され、別れたミミとロドルフォでした。当時
の世俗的な生き方をする彼らには、真実が見
えにくかったのですが、自分たちの本当の願
いは結婚することだと再認識したのです。
プッチーニは、キリスト教の秘蹟としての結
婚をここで示しています。

「ラ・ボエーム」で描かれている自己犠牲
的なボヘミア的生活には、真実の愛と同時
に、キリスト教的な清貧と奉仕の精神も厳然
として存在します。ボヘミアンたちは無一文
になっても、貧乏であることを笑い飛ばし、
自分の芸術作品でさえ、暖を取るために炉に
くべてしまいます。誰かに身銭が入ったら、
躊躇なく友人と分かち合います。そして、ク
リスマスを祝うために一緒に出かけるよう誘
います。彼らはそうして、全額をクリスマス・
イブに使い果たすわけですが、それもキリス
ト教的に象徴的です。彼らの姿は、厩の貧し
い聖家族と重なるものがあります。お金がな
くても貧しいわけではない、豊かさにあふれ
ているのです。

それでも、ミミは亡くなります。そして、
観客は自問します。これは悲劇なのか、全て
がむなしかったのか、と。プッチーニの本当
の意図は違うと思います。シンプルな人生の
素晴らしさに共感させ、観客にこれほど感情
移入させておいて、ミミの薬が間に合わな
かっただけで、それらを全否定するはずはあ
りません。ミミとロドルフォが出会えたのも
貧しさゆえでした。では、私たちはこの結末

をどう受け止めたらいいのでしょうか。

最後のヒントが若い哲学者であるコッリー
ネの外套との別れにあります。厳冬の中、貧
しい彼が外套を手放すことは無謀な選択です
が、彼はそれを売って、ミミの薬を手に入れ
ようとします。そこには哲学的な意味合いが
含まれています。金持ちや権力者からは一線
を画すコッリーネにとって、外套は崇高な精
神の隠れ家となっていました。しかし、今、
その外套は別の役割を担います。「聖なる山」
に登るという使命です。高貴な農夫のよう
に、高貴なボヘミアンのように、愛の精神の
象徴となっています。

聴衆として、クリスマス、十字架へと進み、
オペラの終わりに喜びのイースターを迎える
と思いきや、私たちは瀬戸際の聖土曜日に立
たされて、終わっています。清貧、純愛、ボ
ヘミアの人生を謳歌する精神に意味があるの
なら、ミミの死で話が終わってはいけな
いはず。 「ラ・ボエーム」は、聴衆をハッピー
エンドに導いてはくれません。しかし、天国
への謙虚な扉、あるいは、栄光の復活日の直
前、聖土曜日のキリストの墓前にいざなっ
ていると言えます。

7月の東京の劇場で、62歳となったチャ
プレンとして、私は遙か昔に観た記憶を一生
懸命呼び覚まそうとしていました。幕が上が
ると、記憶とは全く異なるそのメッセージ性
に雷に打たれた思いでした。観終えて、プッ
チーニのオペラ「ラ・ボエーム」はキリス
ト教について思索するのにとっても有意義である
との感想を持ちました。